



全拾冊曲
直五人編述
里見八太傳第八輯
沙之夫卷六
上帙五冊
丁子屋平兵衛校



えさう さて そとこ そりんどん ざくちあふ
南總里見八犬傳第八輯卷之二

東都曲亭主人編次

第七十六回 東都
庚申堂より俠者賊帰を囚ふ
廢殿院小義任船舟を送る

却説石龜屋次國太へ纏マツルる船中と且縁頬マツシタる柱よ擊ヒヤクた。他所持せ。短刀マツタケて拿ハサウ抗ヘリて左見右見。薩ササキ々敏め。小文吾の身カラ邊マツシテす指ハシて却レバひかう。不可マツカセハ那賊婦の假聲マツシヨウを有アリと知スル。もとよとも敷マツシタみ大人シロジの薦マツシタ。疎忽マツシタの事モノを率マツシタ何ナニせん寢マツシタ。是マツシタ外マツシタせ遠マツシタ短刀マツタケ。燒マツシタ火マツシタ大マツシタく星雲マツシタあり。近マツシタ脇マツシタ人ヒトを研マツシタ。是マツシタも亦知マツシタ。へとよそよそ那賊婦マツシタへ必マツシタ是旅マツシタひとマツシタ。客マツシタの枕被マツシタの類マツシタあく水許マツシタ。母夜マツシタ父母マツシタ大マツシタ虫マツシタ不似マツシタ。強盜マツシタる。貪欲マツシタうそマツシタ。人ヒトの爲マツシタよ。其身カラをやひ。

可ふムとひとひとれども那奴が身に藏て島尻の並四郎と喚做す。奸賊の妻あり。船出
候る者あり。故へ首様々々と今うう五穂前秋那並四郎が小文吾を宿所に留め一月を及文
姫へと般彌生と奪畠畠人と計較する辯の趣並は件の並四郎へ小文吾は數あれを船出
る。詭りと些も怨む氣色有。小文吾と牛よ連り。途々千葉家の御役を細上語
五郎の手を借り。搾押せと詭りかども又小文吾は杪を摘れる。の軒計ひとぞ辯立
地よ發見て倒ゑの身を細めれ石濱の城へ幸ち折竊と貰る人あり逐電せとぞえま。之
妻の為体又那嵐山の尺八と小竹條巻葉の刀のるまく。之崖略と説示。頗る那假
ひせめ。轟女奴へ見並四郎。妻船虫か。遠く這頭へ流寓來。俺がおの旅舍よ在る。■
眼病を稍々く無畢竟とも遠坂側の向ふ知る。夫の姿を復えも。遂に今宵よ既且
す。然這一條を除ひ。仇敵を婦せず。夫の姿を復えも。遂に今宵よ既且
とを。太騒嘆ぐ。既ふあゆるあらゆる。よし。疑ひてもあらぬ。那奴の件の船虫と喚す。賊婦也ん。

左の口は信よ。摺鬼の巧りぬ。武藏野よりとようる。近水の水舟。あくま假渡虛往。あくま伏
むを次周太。あくまをや。有理と。氣色下そ。只顧嘆息。まづ。小文吾呵々と冷笑
ひそ。翁よ那奴が巧言虚談。惑ふく。実更よ。聽ゆひ。他倘宣是不烈女か。良人の為よ
讐言敵。と。轍。すんと。欲。よ。形。か。俺。よ。刃。て。捉。止。れ。本意。よ。遂。ど。う。も。忽。地。よ。脛。落。て
怕。よ。と。う。ん。と。投。伏。せ。れ。一。時。よ。及。び。て。必。死。て。極。め。ト。愚。ふ。候。心。言。詰。よ。頭。れ。て。綑。り
れ。す。屬。る。ま。く。陳。よ。す。死。引。き。も。鳥。す。命。と。惜。む。と。彼。紫。の。朱。て。奪。ひ。磁。磁。の。玉。す。混
まと。ひ。ま。の。を。呂。を。や。俺。へ。一。切。あ。ち。ゆ。と。ど。り。れ。て。次。周。太。空。地。よ。晚。よ。外。股。も。鳴。じ。そ。
脣。察。誠。よ。み。の。り。あ。う。這。奴。飽。ま。と。捷。懲。ま。と。ひ。あ。く。寔。と。叫。く。べ。術。寛。か。し。と
咲。な。と。ゆ。と。び。捷。ん。と。立。對。へ。船。舡。よ。く。と。も。活。く。休。ま。と。ひ。と。肩。疑。よ。強。麁。人。の
眼。り。と。見。疏。よ。疾。視。よ。櫻。の。歌。と。す。一。身。の。今。ゆ。よ。ま。え。す。う。折。多。次。周。太。角。力。の。第
子。小。泥。海。土。丈。二。百。塊。鰐。三。と。魚。故。一。を。兩。個。の。社。伎。這。里。小。も。既。利。そ。船。舡。の。生。植。氣。

家鬼と奴婢们喧嘩を起て親人と至次房寺方纏次國太が船主と達合つて
國窓やよ喰大哥と喧嘩を賣戸の陰より遠く共宿を立生へ。次國太も對ひて
大哥達奴大膽なる刀剣三昧せよ。又の隙より趣て鴉鬼をもどす。大略
現體心身とのこれらが責向えと勿論あれども這首を口と中より亦復酷く罵
呼び。由是四鄰を騒え傍もの所例のよ庚申堂へねぐらく神慮儘ふありま。と
之が次國太領ゆく寔はふる義ある。然ば那里へゆくか。二夜舞樓の裸身吊り宵
毎々鞭撻をば首伏せ。が。既準備させよ。と。之を小文吾妻時と推禁ある。神慮
儘とよ。而も。之と。五里人の私刑。あ。の刻薄よ過言と後難か。争何
先願の領主へ訴へ。官府沙汰よ。もと。之を次國太。あ。を。地方の風儀と知る。が。
恁宜り理りあれども。然べ不便の。事。當所の前内官領長尾判官景春主の封
ガ。内官。景春。日山。長尾家の城。在ま。又當國。景春。日山。長尾家の城。と。之。

難病の疾るもの亦不^レと云ふを愁ひ其往歲淹無石室^ノ内^ノ中^ノ時馬架^ノ記^ノ耶計^ノ毒雞
せれすれと^レ折^レる^レと年來^ノ所藏^ノの靈玉^ノ口不^レ含^レ玉液^ノ奇特^ノふくら^レ腹^ノ
瘧^ノ不思議^ノ恙^ノ一^レも亦神佛^ノの冥助^ノ人^ノと憶^レり^レ疎^レうた今^レも亦靈玉^ノ奇特^ノ
祈^レが聲^ノ暗^レむ暗^レ雲^ノも採^レ露^ノもうち拂^レ覺^レ天日^ノと瞻^レる心^ノ顛^レんと尋^レ思^レて^レ遠^レく枕^レ
遣^レす身^ノと起^レす。夜^ノも日^ノも肌^ノ膚^ノを旅^レす。身^ノ護^レ靈^ノの効^レ解^レ足^レ玉^ノと取^レ出^レす。祈^レ念^レ
成^レ參^レと^レ眼^ノ色^ノ相^レ化^レば撫^レるま^レ手^ノ鍔^レと眼^ノ内の形^ノ熱^ノ退^レ冷^レ心^ノ地^ノ清^レ爽^レ小^レ有^レり。且^レ
試^レ不^レ枕^レ身^ノ遠^レく指^レしたる行^レ燈^ノ徐^レと引^レか^レて戸^ノ蓋^ノ揭^レて^レ身^ノ不^レ目^ノ瞑^レす。身^ノ不^レ瞑^レす。靈^ノ意^ノ
毫^ノ毛^ノ不^レ見^レ。是^レ則^レ靈玉^ノの聖鑑^ノ特^レ殊^レ疑^レひ。今^レは^レ未^レ經^レ驗^レ然^レ。神室^ノ身^ノ付^レ。口^ノ
三千餘日^ノ禱^レも^レ。他所^ノ参^レと來^レめ^レ。既^レ而^レ之^ノ未^レ經^レ驗^レ。大^ノ抱^レ釋^レ見^レ。不^レ知^レ不^レ
覺^レ。身^ノも^レ疏^レ。體^ノ怠^レ慢^レ。許^レ三^ノ名^ノを^レ拿^レす。亦^レ復^レ眼^ノ包^レ。撫^レ手^ノ物^ノそ^レ。初^レ不^レ
ら^レ枕^レ。被^レ。微^レ塵^ノ。夜^ノ視^レ。鮮^レ明^レ。未^レ從^レ。歡^レ喜^レ。未^レ聞^レ。望^レ風^ノ。那^レ荒廢^レ堂^ノ

四^ノ假^レ設^レ曾^レ未^レと^レ。身^ノも^レ言^レか。船^ノ中^ノ船^ノ虫^ノ形^ノの^レ掠^レ定^レ。疑^レひ其首^ノ水解^レ矣。
推^レ量^レて^レ只^レ官^ノ入^レは^レ。身^ノの^レ人^ノを^レ戮^レ。愆^レ。怨^レ。嗚^レ。祭^レ。心^ノの^レ也^レ。
の^レが^レ夏^ノの^レ夜^ノ。今^レ宵^ノの^レ尚^レ生^レ憎^レ。不明^レ。不^レ及^レ。丑^ノの^レ鐘^ノ响^レ。比^レ零^レ時^ノ。睡^レ。照^レ。就^レ。不^レ。

不^レ題^レ。詰^レ表^レ大^ノ川^ノ社^ノ介^レ義^ノ住^レ。星^ノ裏^ノ大^ノ山^ノ道^ノ第^ノと^レ共^レ信^レ。甲^ノ斐^ノ州^ノ旅^レ宿^レ。ア^レ石^ノ木^ノ
節^ノ。是^レ遠^レ。指^レ月^ノ院^ノ宿^レ。持^レ。夜^ノ料^レ。大^ノ法^ノ師^ノ。是^レ崎^ノ島^ノ照^レ文^ノ宣^レ。是^レ星^ノ春^ノ
行^レ標^ノ。是^レ大^ノ江^ノ親^レ兵^ノ標^ノ。是^レも^レ少^レ。哀^レ歡^レ。是^レも^レ櫓^ノ且^レ逗^レ留^レ。是^レと^レ又^レ
道^ノ筋^ノと^レ商^レ。是^レ遠^レ。代^ノ東^ノ北^ノ諸^ノ州^ノ。是^レ巡^レ。是^レ又^レ大^ノ坂^ノ大^ノ銅^ノ大^ノ田^ノ井^ノ生^レ。
存^レ。物^ノの^レ知^レ。是^レと^レ。是^レ親^レ兵^ノ標^ノへ^レ索^レ究^レ。大^ノ黒^ノ文^ノの^レ体^ノと^レ。是^レと^レと^レ
里^ノ人^ノ。是^レ大^ノ田^ノ入^レ。是^レと^レ向^レ。是^レ少^レ。是^レ大^ノ坂^ノ扶^レ。是^レ還^レ。是^レ故^レ文^ノ立^レ。是^レ衡^レ。售^レ熟^レ。是^レ豪^レ。是^レ售^レ。市^ノ行^レ
金^ノ真^ノと^レ。是^レ俗^ノ安^レ。是^レ親^レ族^ノ許^レ。趣^レ。是^レ次^ノ主^ノ。是^レ君^ノ。是^レけん^レ世^ノと^レ。是^レ考^レ。

るも似と駭歎す。ひよ録の胸安らむと然。やや小文吾の事も單節といふやがる。
かく這行徳小還らひと什麼何處へ身を寄せんむろかたむふをとるゝゆゑと云ふと
又里人下向へまき。正可よ知らまなあはねがま修蹕を旅らう。真間國府其臺まゝ立
て考更ニ常陸より赴ひて秋の比より玉鋸の陸奥より旅宿をと。今茲の春まゝ那地不
あり五十四郡を徧歷りて東北の魔まど漏とて取足よ信り。涉獵アリがる。春香人ふ
ゆも遇ひて。ひよるひ捨て越路を投げゆ。程よ春過ぎ夏もや五月中旬よりみけり。素
お急ぎ逆旅する。大八の大江親兵衛ハ神駿とす。すと往く。知れどサヘ久山より峰山
不見。谷より聞めが峻岨立て身の危に。あひを奉。日暮を経て越後別魚沼郡の山
里を過ぎ。折其邊の蕃山無山をも徧て。ヒトテ杖を曳く。かづの日も山路より暮て。モ合の
御六十町許もあり。山と云ふ程よ夜ハ多初更の中刻よ。うちも續ひ。一五月雨の天珍く
れ。零春豆方十八日の宵鮮明小山峠より外り。前路ある。小山あり。其首よ故寺佛堂尼院



と。居所の主とあつた方纏れぬる一生で、かくとておひよまひく旅々刀銃とえをも寄
る。あふ處よりは、落迦にて、弘法の御先と并むて、鍋のよ詠やぶ列す名を、殊彌の
名ごそ。神の御訓と、言ふて、願ひをす。疑ひも、這細とも解却し、兄の宿所へ送り、まよ再生の
御恩よ。嘆想す。苦もと身を、血走る眼ふ禁難き紅渡舟の雨と降れ、く凋り
荒と、憂を誠に。ふくろ説けり。甚暮これとえ。年來大田小文吾不仇重を歸
船出えど、神う改身の知るべく、みけんが、恐るも嗟嘆く。少くとも、東人のふに、你の
薄命憐ひ。一家兄の宿所へ何處か、やるの姓名、何ういふと向へ、船出渡を極玉ま
ああああ。宿の宿所へ、這地方うち、半里ぞうりも、停めり。片山里も、猶戸も、名と酒顛二と、喰れ
べ。侍隣小疎の孤屋を、ひとも貧く、食れども、体氣かれ乾児ヨリ、賤妻、ゲ尼と釋
きを。あああ。が、ひ。助けく宿所へ送り、ゆふさを取教び。何ん只を、慈悲と願ふのこと、いがササ介
み。またせば、どうり。ひで、とたま。金を、こゝなつみ。こゝなる。領を、さん亦自然の道理へ、先解却して、泊せんぞと心て、転て腰刀と荷と小刀子と

接合せ。左ひふを。船虫を抱抗。深よ掛る索を研。毒木。枝。一ト。而も。と
膝けい。重索を解。船虫を捺す。足を捧り。乱れる髪を搔き。雅絶。跣足。莊か。伏
字。拝。又。伏がみ。身ひきを。義善。何。世や。忘る。死。手へ。足。皮肉。疼。難
義。身ひき。ども駆れ。ん。憚り。あ。徐。あ。退。ん。ひ。送。せ。ひ。る。肩。ひ。う。の
脚。恩。ま。そ。と。遙。む。を。せ。介。推辞。難。て。足。趣。餘。毫。も。宿。投。移。行。新。外。路。便。宜。有。有。
宿。遠。届。け。ゆ。ま。り。ん。徐。す。階。す。と。踏。へ。降。と。ら。の。船。虫。又。伏。拝。と。大。か。り。及。脚
洪。恩。ゆ。ま。兄。も。感。心。今。宵。の。宿。泊。と。ま。ざ。ん。允。を。り。へ。と。と。と。膝。ふ。掛。く。せ。き。く。是。と
起。き。と。せ。翁。翁。勲。き。林。林。根。根。想。す。樓。上。よ。と。降。へ。マ。外。面。不。生。時。墳。作。壁。あ。鎧。卷。竹。の。
太。ち。脇。と。椎。打。マ。船。虫。取。ア。ク。船。虫。受。戴。マ。杖。と。突。マ。山。也。も。莊。介。と。共。侶。ふ。夜。の。山
路。セ。熟。よ。如。く。丈。と。約。半。里。許。童。子。篠。子。酒。鰐。二。隱。宅。へ。マ。く。ま。よ。け。這。里。ハ。山。院。の
荒。迹。見。ハ。ぬ。か。よ。礎。あり。只。松。柏。の。老。木。彼。此。小。敏。然。立。見。亘。モ。限。外。ふ。家。矣。然。

と。舟酒顛二、隠宅ハ原山院の庫裡より、へざる。隨ふ廣やす。坐席三房、二房、
三房、
も。つこのよき方ある。と。此處に。酒顛二支當事の恩棍を。十五六名相取衣す。酒も喫す。船虫
然も知れど、俺誰か一趣を。多く良人す。其聲ぞん。這旅客と對面の折。応答不都合
まべとふしられバ。其分を。宴時門頭より立て置く。遂く門の内を推開。又引廬て以
て裡面。我ら一と酒顛二も及支當事。先は見ゆ。声をけく。今宵り幸と。遯る。
今。今とて兩丁と。噂を。等久く。とよと。船虫よ。枕て推禁め又外面へ指し示して酒
顛。身邊迄。蹠居。恁と。今宵。首尾と。其う。酒顛二。含笑大笑。我番。頷だ。
却同恩の申乙より其へ續よ。箇様々と。そやひろと。ぬこせ。久。夢。假想。不身と起て。軀へ
躰を。身を残す。余一両名喰散ヤ。盃盤を。底壁下。よた寄て。其頭よ席を。備て。を。
さむど。さむど。なる。やあ。ゆき。まの。もが。と。ふ。そ。う。つ。た。も。も。こ。の。ゆ。う。り。
余程よ。莊介の憶を。船虫を送り。また。且く。門頭よ。鳴立。折。月。雲。入。下。這四下の
ありさま。つと。光景を。巨細。見る。寝とも。辯の趣。意外ふ。出。訝。か。と。と。り。する。非如主へ。猶戸。有る。

のちのこのよがとく。一
信り地方へ往儀せり。要すと正や應介へ裡面の客をそぞる後、お達疑ひを釋く。あくと云ふが
阿容する氣色も取く。主人の案内を俟ちて、裡面う一個の支帳黒づ邊へ立出來て、籍合ふ
處へ對ひて、誘とて、席へ案内されしハサ莊介へ引ひ、隨す草鞋の綿解捨て、儲の席不着程ふ
あり。ト、すこひど。まへまへ、と、とれ。方だは、まちとう。ある。ある。
酒顛ニも亦身を起す。找と對ひ、嘗て且きの長途を勞ひ。小可則當田家の主人酒顛
ト、と喰きゆえ。女弟の凶耗を拯そゆひ。御洪恩の趣へ目今他う報えられ、具を承知仕
事ぬ。身へ何州の方をあすて、獨行をす。やん願つて名告をゆか。倘武家方の主用あす。
只官路を急せゆ。足跡力あらず。と向て、サ莊介頭を掉て否。某は東國の浪人姓名
のみ。うきよ。うびゆ。五、夕暮。も。とも。うちも。もうれいの。そせを。を。を。を。
大川莊介と喰做をす。ぐれ。比より故あす。友と索ひ。被此と遊歴一稔ふ及び。ち。
今す。今宵。宿喫。まも。山路の荒廢庵。よ。總ひ。折脚橋。ま令妹の。研。縛。せれ。と。為体。を。を。
忍ひ。ごろの故あ。本。寃屈の。呵責。不休す。寔は不便の。る。れ。が。已と。と。解却。と。請を。隣
よ。よ。を。と。され。わ。ふ。夷と。共に送届け。俺们の安心。ふの。まよ。今宵半夕止宿致。も。不測の。寝。曉。別。

奉公の原
官府を據る
日を握る
市を擇る
中を取る
牌を立てる
金を立てる
義理を取る
詔書を取る
呼む

告人のモヤよ某が官もす且令妹を勧りてとひ不酒顛二さひ女渠へ納ドよも夙す。
既小將自の術直あり筋骨の疼も忍へて膏肓までおへと乾兒们よりと吟呻てはか
高石を挂め他へ近曾帰るるを況子ひきよひも歳も這里へ召されよ
守り赤妻子みれが奉公せんとすの儘も小千谷の御宿客店へ炊妻せとて遣せふ又有
あら東人の疾忍情深の達恨と酒衣と被ぞ殺えとせた。怨びて嗚咽憎む
あるのち。そよやかに立とせた社介の邊く推禁めてあまの決く無用を齋此剣の筆の残
長の語で丸管符の後れ快夕餌セテ充准備せよ。と三忌せば恩親輩の
立ちえ。そよやかに立とせた社介の邊く推禁めてあまの決く無用を齋此剣の筆の残
て。若むまこととて社介の邊く推禁めてあまの決く無用を齋此剣の筆の残
て。昔の修あやゆける。あの黄日小なべく俺幻の歌を一房と借りて睡ん
の。と椎辨を酒顛二張難と小夜深れがやかま東西とみねれも然ざあま
ま無造作之間まとてはぬ餘もあれど心ぞうぶ躰ひの盃を薦めまくん甲乙上盃盤
す。

碗碟を洗淨めは忙易よとくをせは介又林木の否果の生來沙量へ路の夜歸
食あねがはまに近修す睡てのひ。嘗ひ酒と浴れて從ふ天を明えず。遂に復
す。官待さんと渴みを飲み休まとられて酒顛二頭を擡て熟まづよ固く姓ひます。
魯山のよ仕せか倒て無れ不然急をのめ旅事未權且這里ふ留り。古迹と遊覽
素が。新舊寄。御道主と致せ。官待と仕え。夜りをや既ふ深夜は就寝のみ。おみ
下。這里の名をよ雪国見。蚊入蠅え拂ゑ等の微雨の比屋棟裡より處は只蛭の
落すとあり。よく蚊帳を用ひ。忙交轍よ南向の八席房の卧簾と儲て室内外せ
よ。吹拂らす。と。两个の支當あらぬく。そやうの處を蚊帳を垂て枕よ臥簾よ。床圍よ
うち牛耳つ。井介の誘使を室内外を巡程。小莊分り酒顛ニよ歎びと演刀。不入より。

第七十七回
内命を傳へて由元二客を招く
オクオフセ

綽雪折不進退好。

風眼と思ふ。毎晝夜を走り、其後擧手する。されば、船中へ假聲者と做
て按摩を執つて、小文吾を徘徊半程は、小文吾も入にて近づくと、ひそ
かに腰示して奴家が武藏の在り時、故夫鷗尾の並四主の小文吾奴を殺したる
折奴家を擒捕られて石濱の城へ牽き夜又不測の人の資より、那地を脱ぎ去る。
五稔已前より、余櫻井の日開半の折、那奴を觸て観て規方より、舊怨より、堪え難い、繫手果
て故丈の姿を復す復えど、身は無事、快く返所あり、舊怨より厚くて新怨
をうき、
情義薄いとせん、欲をく、初よりて、只がん、却余後を少くへば、曠音より、小文吾は近
づく、他が肩上癖を撃と久一からじ、が、那奴は皆目尽をれ、奴家人とを些も知らず、寧々よく
便とあれ、懷刀を拔出で、頭を搔くと、辛う、那奴は利口と捉れて投伏せられて更成
ら、ま、新交次國泰相討す、神慮仕ふ做りんと、兩個の乾兎をも併せ奴家を縣て入煙
がれ、○ウモヒテ、ひき、見のうる、みる、ま、ちとまじめ、みとよ、まわる
盡れず、庚申堂へ牽ゆて去る、渠ふ吊し、三人とも、ひの隨才競賣と程立の夜、又明

後の夜も鞭責められ死んで千隈河へ推論めんと罵誇り生きてゐた勿論那小文吾奴
み身の記憶ありぬかねバ奴家と船虫をえん次と疑ふのとあや目のえをばそぞら便りま
ちども那儘かと二友まで呵責不遇が爲めにそ折りすと都旅客其首を襲ひて死牛
氣も知れ奴性すべとす朝くらも引びうと奴家妙手ひ瞞めと送れてかすまつて
され設怪の幸あれども那次因太ハ小千谷の老侠御の打城と做るの跡み蟻の塔
塘崩きと這隱宅を観着られみ後の出来事と筆何見と云ふの用心あるへか。とりよ
酒顛ニも多々眼と脚で卷て捨りて。未安とぬ椿車と石龜屋奴ふるまゝも俺利き
るよあねども御口と利口ともいふぞうのとやせん先ふとれが人を征し彼ととくに征
ても亦是自然の勢ひと爐内ハ所要あく塚の山へ遣しよふと運びまわるの聲
家が這里ふ在今宵那里へ推蒐と小文吾次因太之がゆゑに廬室の奴仰廢金
あく渾家の與ふを復えん大家夜入の準備とせざと敦因悍く罵りと船虫を

推せり。ここに愉快なる處也。这里は一箇の脱落す。今宵宿せ。大川と雪ん庄合ひ。夜
遊旅武人を夜入の事と知れり。後難免也かと云へ。といふ大家齊脣。一云松井。又云。和
魔鬼乎。那旅客の臥竈の邊す。器械草鞋皆これ。是も不便す。あらわす。と云ふ。酒類
二合笑ひ。毒を咬み碟を破る。一人を厭ひ殺す。然う邪魔鬼乎。云ひ。那遊旅武
狂介の身の皮もろく。衣索。一旅宿でゆき。と云ふ。鬼へ必殺薙刀。軍神の
血祭。殺す。後の患と除か。只是。一車両全て宿鳥ハ錆。と易す。無理。結果
け。ほとん船虫然うと忘。と云ふ。船虫も。と以も。主と食
ら。と。一人や二人で。やれん。と。酒類。二文。冷笑ひ。役者。立ぬ。頭虫们。健啖。豪傑。集
め。各。の。を。と。云ふ。り。も。も。ま。う。目を津々。那旅客の面。鬼。倘。蟲者。修行。の。よ。か。素。す。本。車。中。主。を。ほ。ん。て。思。量
け。ほとん船虫然うと忘。と云ふ。船虫も。と以も。主と食
ら。と。一人や二人で。やれん。と。酒類。二文。冷笑ひ。役者。立ぬ。頭虫们。健啖。豪傑。集
め。各。の。を。と。云ふ。り。も。も。ま。う。個の敵。百。四五石。俱不蓮。若者。修業。の。よ。か。素。す。本。車。中。主。を。ほ。ん。て。思。量
け。ほとん船虫然うと忘。と云ふ。船虫も。と以も。主と食
ら。と。一人や二人で。やれん。と。酒類。二文。冷笑ひ。役者。立ぬ。頭虫们。健啖。豪傑。集
め。各。の。を。と。云ふ。り。も。も。ま。う。巨刀引提。立勢ひ。勵。若者。取。而。や。そ。ひ。ん。大家齊一。鞠。步。マ。一。房。を。隔。一。莊。公。

臥草す。宿す。是れ。懈。無。隨。り。何。地。方。で。けん。影。ひ。る。大家。猛可。喧。噪。を。原。來
か。や。つ。み。そ。と。云。づ。那。奴。の。耳。聰。く。密。談。で。え。や。ア。知。く。逃。亡。す。駆。れ。於。庭。の。樹。下。隣。子。の。下。ま。ぐ。隈。る。く
素。ん。皆。出。す。と。四。言。動。く。と。酒。類。二。堆。禁。め。那。奴。ハ。他。御。の。旅。客。在。れ。か。殿。漏。や。と。惜。む。是。但。
翼。石。屋。屋。へ。暮。す。ゆ。て。這。方。の。り。と。告。れ。る。殃。危。厄。起。る。て。夜。が。丑。三。と。あ。が。は。那。奴。
家。の。主。の。あ。や。あ。素。ん。皆。出。す。と。四。言。動。く。と。酒。類。二。堆。禁。め。那。奴。ハ。他。御。の。旅。客。在。れ。か。殿。漏。や。と。惜。む。是。但。
及。ひ。が。不。や。生。不。と。身。と。固。り。と。器。械。引。提。て。出。ん。と。ヤ。セ。船。虫。の。屋。の。喰。禁。屋。す。と。云。す。
先。の。酒。類。二。堆。禁。め。那。奴。ハ。他。御。の。旅。客。在。れ。か。殿。漏。や。と。惜。む。是。但。
ま。腹。愈。は。奴。家。と。殺。す。と。あ。と。そ。も。身。軍。主。防。ひ。て。か。り。刀。て。留。守。す。一。兩。名。送。一。房。を。
か。ま。の。危。く。ん。と。新。し。外。面。か。か。ま。の。あ。り。是。則。別。次。争。と。比。量。裏。す。去。洋。文。明。武。藏。す。
四。谷。の。原。表。ま。の。波。雪。奈。四。郎。よ。上。拂。と。肩。く。盤。彌。の。金。子。を。迷。す。か。奪。と。り。く。争。す。對。て。
躲。と。あ。亦。那。恩。僕。爐。内。に。燶。内。に。ま。歲。の。冬。越。後。の。塲。の。山。は。逃。れ。事。博。徒。の。界。計。不。今。い。

。ぬを す カタニ ポミル つひき おとせ
ありて縄う全ノ決済ノ宵をアグ被累も御免を乞ふ植達酒顛ニテ下より春の比う
酒顛ニ初ハ單身
造首ふさう。あの日ハ塚の山ノ所用あり。今朝未明ト出立原盗兒の手あれハ倒夜行と便利
エリ小船重を尋ふ
よが
とく深夜かすま。同話休題酒顛ニテ折のまく方縄、爐内、かすま、そく遙く喰近す。
やよ燭内縄急角ト觀面を意を盡せしむ。達酒顛ニテ今も大家と俱よ小モ浴ヘ夜入よ趁く又危
き處と胡乱め。死活料をか。和郎ハ素ナ才覺あり心も悍氣のあれ。今宵の留守を
きりとぞ。

。必ず す かたに ひる つみき おとそ
す竊とう全八次雪の消えどく残りし御先をもと植田達也顛二、下すすする春の比う
遠日さう。あの日ハ塚の山よ所用あく。今朝未明より出ま原盗兒のすすめられへ倒夜行と便利
とく深夜よかく來る。同詰休題酒顛二、折のまく方絕に船内かすとぞと邊く喰道す。
やよ船内縛急危れい觀面ト見事手盡ま盡す。船今も大家と俱よ小舟へ夜入よ趁くへ又俺、
をまくと胡乱ひあだ名料をかく和郎の素よう才覓あ。心せ悍浪のあれ。今宵の留守を
まふ。よろこびす。船虫すねか。とらひく種子嶋の小鳥銃を懷。とうとう出す。這炮
銃ハ北国今る稀見る東西あれ。俺年未秘藏して利を得ると勘へ。そ今宵ハ元を送下
四道て權且和郎不預見仇入まぬと見る。火蓋を被て轟留よと雖せりく説示す
その鳥銃を貰ふを。船内へまよあらむ。どもうち隨不心す。や宣上趣みたり。是
あれが衆人す國へ足ノ掛をもれどろ争く繁既よ。となり酒顛二領ひ。又船重は達也
と留守の用ひあえど示す。やう進むと同應て先不卒ておまゆ。おまゆ。おまゆ。おまゆ
。おまゆ。おまゆ。

まく目送り。却説大川基介は是より先に臥房にて奥の酒顛二門を密談て聞く。多
をとんとあらひあるへど。羊向許間通ふ隔れ。護身畠衣を收め。那雷巫玉の奇特ふうに船虫们がつゝとまく
るの様。御音くが如く。壁。五十瀬う。御音石の入詔を移しよ異う。言詳々。アラク。舞
驚て走へ。歎び獨穴禍。俺。推量。是違ふ。酒顛二は是賊の頭梁。又俺。今宵
をかと。送届け。船虫。とう。妖狐奴。女房で。あひを。斃れぬ。餘す。然る。モモ。小文吾。
當日故郷。還。這地。旅宿。五稔。以来。幸ひ。もの。遇。け。三大士の隨一人。さ。博順。這里。さ。そ。程。屋。今。各の。篠。石。龜。屋。六。因。太。と。よ
く。客店。久く。近道。及風眼。う。ス。と。の。克。を。と。う。す。ま。か。財。居。の。眼。浅。差。そ。
今宵初。知。と。ゆ。ゆ。奇。へ。劫。う。る。什麼。ま。も。衆。賊。行。今。よ。う。那。里。を。襲。擊。ひ。眼
疾。不便。の。太。面。ひ。窮。距。十。リ。九。分。九。譽。免。そ。と。か。く。除。一。然。ハ。ヒ。と。俺。身。ひ。と。月。今。那。首。酒
寄。酒。顛。三。と。船。虫。を。擇。着。做。そ。う。が。萬。の。島。合。の。小。嘵。囃。咸。立。地。逃。七。て。大。田。尼。釋。へ。先。も。

不知案内する恩裏の事は既に異て前後許多の敵を蒙て利益ある事亦かうるる危咎
臨ん。うち開設室縄の退散す。他們が内々切り折り紛れ共に小手合を到つべ向むて石龜の傳
利。にて焉れ。傳く那里の内頭少く名告す酒類二と繫き捕らる。もと主人有田太四隣の市人志す
壯俊の走上相援け。衆賊と俱ニ襲ひやせん。彼もとたゞ小文吾の大厄を禪ぐ。之故ぞ。
賊の根を断葉を枯らす。地方の害を除へ。吁余をと肚裏を分別既不決せば潛す。是
を。さらば。起て柱を抜き草鞋と取面し穿替て又裹塵を九尺の短鎗の玄冥鬼を禪取て。小
篠の門内へ現體。早に剣刀身装も縁類もぬく。と一矢あたり程丸竹敷不
脱ひ。衆賊を這里に俟つ。余程は酒類二の鎌短衣。甲脚甲鉢。巻小脩
刀と跨ぐ。右より短鎗と被ふ器械令する十五名の主黨を後不徒へ先當立火薙隊配り。
大家急げと逸足坐く。走る跡。其介の鎧引札。隊を給ひて共作す。走りて折り五月の天
氣れが驟空。零月を度り。朦朧と警隨す。酒類二の自餘の賊も竟非サ社令と認せ。只是大
家

家の一人へとぞ。些力無念。見えぬものあり。想而童子。簾子。酒類二。石龜屋。大
園太の内頭。よそ。推寄。朱の門戸烈しく敲かく。主人次園太快生よ。這里に宿せし
他御の族人。大田小文吾。然處で復讐の意。命惜く。小文吾。手索と被て推出せ
異説。及ば。廬宅の奴們一人も漏毛を研盡。えん。這里。刺史。と諸事。立て執事。猛く
呼て。間近く臥る奴婢輩。車の駕。覺つ。吐嗟。と。う。怕して答ひ。も。登時。主
人次園太も覺て。奥うちままで。且戸の間より。來つものを。覗ふ。面魂皆猛
惡形。癖者通て十六七名。短鎗。竹槍。脩刀。と。い。合ひ。異形の打扮。是緑林
錦繩の傳。うんとぞ。原來那假聲。の同類。あ。う。知る。襲来。傳。疑ひ。年
僕。ハ。このれ。大田の大人の病眼。敵。と。平何せん。や。背門。うち落。えど。尋思。う。昔も
セ。も。鞍馬。三。も。坐。の。あ。ふ。し。ど。草む。さ。ね。う。と。う。の。う。か。と。う。も。
徒の。多。勢。二。宝。三。し。と。う。橋。あ。人。う。接。や。る。の。う。う。け。既。か。と。外。向。去。酒類二。頻。イ。不



窓伏せ、裡面

焦燥て急々。は、ハ、ワス。
逃亡を容赦なく。射撃物一發戸を打破て稠入らず。てゆく。
四駕高声共唱。一個の支當准備の擂槌を振抗て戸垂粉ふ打ち摧滅。走入んと。程不甚
ひきえ。隊うち大川莊介頭生。大喝一声。肉を鎗の刃矢へ地上の電光瞬間。事件の賊の
居る。下りて。ま。知る。高橋大田の主人も驚くべからず。大川莊介も。あ。百走の賊へ俺底殺
え。背門より。角等。う。と。三番。喧嘩。駭噪く。小喧嘩。又。西。名空大仆を勢ひ。完猛虎と
ろ。お。ひ。下りて。ま。群羊と屠る。向ふ。前見。武勇の剽姚。克。ふ。でもあ。危れ。賊徒へ。怕れて辟
易。あ。れ。と。ぞ。り。ふ。較。さ。り。を。よ。か。不。
意。あ。れ。と。ぞ。り。ふ。較。さ。り。を。よ。か。不。
意。あ。れ。と。ぞ。り。ふ。較。さ。り。を。よ。か。不。
意。あ。れ。と。ぞ。り。ふ。較。さ。り。を。よ。か。不。
故。ゆ。そ。聊。勝。す。無。事。ゆ。と。よ。も。ヨ。ア。宴。の。和。れ。う。孤。客。の。鎗。頭。づ。ぎ。り。の。正。め。の。除。快
り。つ。こ。よ。う。と。の。そ。ま。推。包。て。轟。留。よ。と。四。駕。將。大。え。一。支。當。黒。ハ。又。莊。介。と。轟。留。と。半。分。り。裡。面。よ。稠。入。を。小。文
ご。む。ど。よ。さ。の。も。さ。る。吾。ハ。次。園。太。と。俱。よ。刀。て。うち。振。り。先。す。進。く。近。く。賊。を。砍。靡。け。難。伏。せ。逃。る。を。逃。

未だ。やいと。鳥夜燈燭あき。主ひも。寝る邊のあらす。ふ夜盜大勢推蒐
主と。ヒミ修起坐て。主人と俱下草賊門を聊討捕り。と答る間。又次國太も。お立
聚合て。却サ介よ名告ぐ。苦よ争ひて。腹て又ひ。是不由折れ大敵を衆賊の夜令
準備のあく。加旗兒客人へ。小文吾病て。皆目ええ。が。つあとのぞえ。が。よみの覓
期て。ひよ豈只り。や。畜の大人の病眼。夜中。痊可。進退自由のあく。見友達の物もく。
這地は旅宿を。ひそ。すやも賊と滅へ。裕と云恰といひ。軽び壁。すまのむを。とふを
莊介少め。こそこの口誼。始く措て。身緊要の一議。あり。某ノ得。くど。甲夷。よ。徳。の
山路。荒廢。堂。よ。舊。ひ。折。那船。虫。う。は。賊。帰。の深。子。吊。え。て。て。出。る。訝。り。ゆ。ち
之。故。と。詔。の。よ。那。奴。巧。よ。歎。ひ。首。様。う。と。の。よ。の。綱。と。解。卸。し。く。墮。よ。他。宿。更。入
送。遣。一。うち。よ。宿。所。の。故。う。孤。屋。か。廢。駿。院。の。跡。よ。修。う。且。船。魚。兄。え。義。う。賊。の。頭
や。。あ。も。ど。よ。る。の。え。が。り。宋。か。酒。顛。二。と。喰。做。を。あ。え。某。初。か。在。を。知。を。曉。て。那。宣。黒。の。密。談。と。具。不。聞。者。ア

これが疑心ゆゑなく冰解して那船虫ハ當初藏る阿佐谷の奸賊並四郎妻モ一
る。并事件の並四郎ハ大田生不穀也。今回又船虫假聲女と打扮て怒と復讐とせ
り。夫妻で漏泄モ、听得りづる懷る靈玉の加護有んか。徒而賊首酒顛ニ。這首へ夜襲す
推寄て毒船虫。新舊兩度の怨と一時又復元とて譲ると既不急。登時
某呂多。不知室内を。遠所すゝ多賊と駆りんと御さん。他們と俱す小谷子到て。
石龜屋の門頭す。猛可起。拉び。賊首と殺し易かり。と尋思。首。首様々々計り。
但子らへまよひ。酒顛ニ。カヌ又支官黒とも討捕。衆余。多賊帰船虫の體内。どうも
一個賊と俱す留守。那首。方。總。酒顛ニ。行。擊。死。と。少。少。必逃走。那
奴前後。震。草賊と。夫婦。毒恩。鴉盜。セ。前後。震。草賊と。夫婦。毒恩。鴉盜。セ。
兩度。あ。多。售化。天。人。借。高。罪。人。を。走。う。が。蛇。殺。く。頭。摧。モ。後。墨
送。モ。似。上。近。里。よ。賊巢へ。オ。多。半。許。る。モ。誘。之。天。明。る。か。大。脚。虫。を

屠さへ。や快きとひやく。孟獲略を殺し、次國太にナツマ。且奮れ且威は。頗る軍と傾けり。就中、小文吾の听す。毎よ感嘆して。通微妙。大川生敵と知り。進退の度が當ら。是兵法の貴む所。計略感。まよあまわ。ゆゑく船虫の俺身の仇言のを。大辟不赦。罪人を挙げて。那奴を殺し。只御直す。傷のより。舞はま。詫うも又那土文二輪師直亮父。石龜屋。強盜。多き。僕等同志の社役十名を。敵起。駆催して。六尺棒。突き。天の明る比來。かね。次國太。土文五郎。僕等。土文二輪師直亮。和専門。過半。存す。比屋の人々と共に。偕より。御長。殺指揮。盡して。衆賊の戸駆。とも。腰。俺へ。這方。高達。と。賊の隠宅へ。趕驅め。木根を。錘へ。と。又。之を。と。諭。裏面。まづ。逃隠れ。女房。嗚呼。善。并。奴婢們を。喚出。又示。と。上の如。之を。配送。余間。小文吾の在令を。先立。賊集へ。ひそ。を。次國太。鯉。三と。社役五六名を。宿す。金後代。と。二大士の跡。走。有。下程。廢殿院。●。隠室。洞穴。

八と喰做る。兩個の小囃。囃がまく。酒類。二。其他の。も。大川。大田。兩勇士。の。果あれ。縛の趣。箇様々と。縛。一。船。虫。も。廻内。の。眉。大の焦。と。騒。噪。立て。見つ居て。ア。でも。計の。出。所を。知。られ。走。不化。と。尋。田。而。自身。暴。一。臂。透。金錢。衣裳。と。腰。着。背。子。駆。と。共。偕。立。去。ん。と。折。船。虫。ハ。廻。穴。八。うち。對。ひ。俺。丈。の。連。竭。と。大。家。の。人々。と。共。偕。と。果。敢。と。數。見。引。歎。け。と。も。今。ハ。益。頗。大。田。と。大。川。奴。が。里。人。を。駆。催。と。も。と。と。別。館。細。と。受。ん。よ。廻内。と。ゆ。投。落。て。や。ん。と。と。ゆ。の。海。達。も。宜。な。東。西。と。駆。の。方。限。り。擔。造。り。家。と。火。煙。と。翁。化。何。处。へ。と。影。と。駆。の。迹。と。馮。む。の。捨。と。蓋。ま。の。櫻。と。東。と。投。と。出。と。ゆ。の。あと。へ。と。も。を。見。の。事。と。ち。た。ま。●。ま。が。ま。の。石。龜。屋。次。國。太。が。片。貝。殿。景。春。へ。訴。と。駆。て。捕。と。向。と。居。と。楚。と。駆。と。種。子。嶋。の。鳥。鏡。と。携。て。趕。あ。の。鱗。す。宦。と。眼。と。配。不。敵。の。退。際。

今朝後、胸糞用あり、合ぬ飲み拭き糞盤緩を替へ。十二轉、五三倍死二引後、二人連樂きて、其の世界五死加四苦六溷六と穴八算小告別。明日天と不樂樂、樹下磨の路を討め、はたけ枝あて彼の茂林と離う鳥の声、山鼻遠く、あり引東晴れ、微雨閣の朝日向、莊介小文吾と共宿る賊、巢木近づニ町木子お身一時小文吾とえと、那廬内うち双ヶ酒顛二が預ける鳥銃を持え、うかと不樂也。首面をあらひそとつは小文吾ある。ゆき去向、忽愁と自焚、煙立升りて刺々々と上百姓のよどど、船火の邊へ端々て走着れり。登時溷六と穴八を取え、東西皆擔造。抬出も隠宅へ火を放ち却退ひて庭より担き件の重荷と擔ひ抗ひて程よ力に折れ、擔素も断す。東西皆滾出をあへ、火粉忽地燃従り。火失ぬべし。が二賊吐嗟と狼狽譯て、引出えんとちつ。折二大士走り近づく。那為体了些も猶豫せ、番草賊等と喰被。声よ驚く、溷六

穴へ逃れども、既不猛火は遮られ、一步も退ひてゆる。前大二大士立塞り。脱ぎ、もわが花ば此被齊一跪して許さず、とても傍詰る。二大士壓疏倒し。解る擔索と擔合ひや、巖珠繫玉綱り、且風服は牽ひて退け。船虫と廬内門が往方を緊り、責め向ふ。二賊答て船虫ハ廬内と引く遅早く東の方へ落亡。不可らま々う。あとで、とおもひ。又首様を跡は送り、褲の趣ある隨首伏モ二大士死をもぞ。お情なす。勇ん他戦ハ左され右され、那船虫を走らせ、熊を殺す胆と採げ。憾よ何を異む。遠くへ、趕蒐人と俱は、豪園に罷る折る。次國太入鄉三と自餘の壯健们と旋へ。やあく走着る。が、二大士ハ船虫们に走る。おもひて、部を走る。趕蒐け。が、中止は入れて、這里より一個は役不索を却て、又園六と穴八を責て酒顛二。船虫們の宋整素生を同く。かが二賊ハ、匿を正すをほづき趣を送り、招道をす。且くより、船虫と酒顛二と相計り。磯九昂て發ぢるも、又船虫と信履路を流落する。酒顛二を帰る。うかと不樂也。廬内ハ

孔子曰似是山林の顕延之と何尚之よ似う。是外圓のみて内心何を同うんから故に但貌を
多く人を取れ。聖とらへども心謬る那國六と元八の大田大川よも似たゆも亦比へて知
べる。問詰休題再説次國太り小文吾社介よ相傳。小千谷の宿所よかうま先
二大士よ饅と蓋め不盡と薦め。江官待大々形と笄よ土文ニ鯉三介の社役のあ曉
よき这里よをり。邪首よ卦へ死よ。家名も酒を飲ト飯を啖て留守の首尾を同毛後然ハ
ヒアドリ。土丈二们ハ曉るよ四席の人々と共侶す。上郷長よ観知く。時を移さざ候始末を領主の陣
屋よ告訴せ。有司速よ到来して戸嚴の実檢古又詭り賊の頭渠童子等箇子酒
顛ニ。支黨不至。まて鳥首モヘと宣捉す。既顛末と糾問せし正衆賊て數す。而
武勇の旅人大川せ。大田小文吾們漏えみば宜く廊沙汰ある。又は宣示出ゆとかん下知あ
ひそむ。とそそ。とそそ。とそそ。とそそ。とそそ。
二大士も件のゆを懲マと咎え矢うち。みづて郷長の宿行こじに二大士が方手をもよ

と又二大士を賊の隠宅にて圍ふ。左はとよ二小賊と生拘り、趣せ簡様にて漁遊へ。達
至る訴る。と驚てかさ不比屋の市人許立す。公吏又より公私びと漁をと頗難く
病後の浴湯制梳。今もあらがうけり。余間々小文吾。其は人と俱不客居す。會話の數々ある。幾毎單一叶、
病後。浴湯制梳。

と又二大士が賊の隠宅を闇六穴八とよニ小賊ニ生均レバ趣セ簡様セシと漁浦一ノ遠
キモ訴メラ。ト禪テナシト比屋ニ市人許立オク。公賣ニ勞ム。移びて漁ミトモ煩雜ス
テモウラガケ。余間ニ小文吾。サ幕と僕不客房テ。會話の數々キ。曳キ單節。又之の趣又
並四郎船室。馬加夫記常武が妬三。研計ム。次年立月。身と石濱の城下
禁錮られ事の裏末。并ニ大阪毛野。も預讐吉の智異各勇敢ミの折毛野の資
より。石賓と逃去。依介も。文文五兵衛が送。又親兵衛の主。莊照文ト文
治。之を夏首。却少文吾。大阪毛野。幸。而。鎌倉。旅宿。後。渡海の船。破れて伊
豆の孤嶋。先頭。送。て。幸。毛野。浪華。便船。國地。有馬。湯治。這。物
やれ。遊歴。二十村。聞牛。折暴。牛。料。小角。力。磁。九。醉。狂。枉。死。身。眼。病。靈。毛。
體。心。奇。特。の。主。次第。奈。と。説。示。セ。サ。介。耳。傾。頬。底。嘆。声。施。毛。
テ。果。入。身。去。來。荒茅山。離散。折。大山道。即。と。共。宿。大塚。大飼。竹。往。方。

あぢやく欲む折へ



駄で轎子の後は隊をかうゆ 程々途す日暮日暮けり候而其介小文吾に片見子到
了時那別館の門前す。轎子と立坐。引ひて老臣箱戸津衛の宿所を起ひ。一
津衛大家の家主す。床櫈内交の先が宅地ハと廣ゆ。從類も甚しそ老僕
若輩三四名を廻て兼て二大士を玄関より迎へて。多忙書院へ安本内を志げ。看茶の
侍詫モ一時稻戸津衛由元の萩野井三郎と從へて出で二大士と對面。爲
功セ席表也。威勇と稱へ且内命のうと演て盃と薦する。主客の辨讓言証て津衛に嘗
歎の爲す。稍ち枕も土器と負地破と擣て寄りや。六門と頃り。高ゆ。此より廊下
き。幕の陰で顯化す。捕まし力士二三十名走鬼の後。粗むとえうす其介小文吾
を何と驚かし。搔扒と投退を。雲委時の偶子桃も。大聲を震ふ。其間不
折里少て押入室を揺す。畢竟津衛公理不盡。二大士を綱むる事情が甚廣。是れ次第ふ解りて。
●
里見八犬傳 第八輯卷之二 終

●
聽ひか。

天保二年卯

年

冬十二月十二日寫了

著他堂手集

筆

福

硯壽

大吉

劍

市